

40 「法蘭院病中日記」と島田筑波

深 瀬 泰 且

順天堂大学医学部医史学研究室

法蘭院はお玉ヶ池種痘所の創建に協力した添田玄春の実母である。この法蘭院の天保一三年（一八四二）八月一二日からおよそ二ヶ月にわたる病状をしるしたのが、山崎文庫が所蔵する「法蘭院病中日記」である。この間に往診をうけた医師をはじめ、見舞におとづれた人物、見舞の到来物などが記録されているが、病状についてはごくわずかしみられない。

本書は一六・四センチメートル×一二・二センチメートル、三二丁の横小本である。島田筑波によって封面と巻末に識語が付されており、そこには法蘭院が添田玄成の妻であり、玄春の母であること、天保一三年一二月二二日に病歿したこと、浅草の了源寺に葬られたことがしるされている。往診をうけた医師には伊東玄朴をはじめ、西川玄泰、岸田元碩、甲斐静庵、松永

老岐、山口観竹、林玄宙、真嶋瑞伯がいる。ほかに親戚筋にあたる溝口讃岐守と堀本一甫の名がみえる。溝口讃岐守直清は伊勢守直道の嗣子で、中興小姓をつとめる五千石の旗本である。法蘭院は溝口氏から添田氏へ嫁いで玄春を生んだ。堀本一甫は奥医師法眼の家柄で、代々一甫を名乗っている。玄春五世の祖豊寿の女が堀本一甫顕晴のもとに嫁ぎ、この時以来両家は姻戚関係にあった。

法蘭院は天保一三年八月二二日朝六ツ時に発病した。この日西川玄泰と岸田元碩の二名の医師が往診している。翌々一四日には伊東玄朴の往診があり、以後一〇月一四日までの六二日間に二三回にわたって往診がおこなわれている。八月中は病初期のためか、二名乃至四名の往診があり、「夜話」もおこなわれている。これは宿直と解していいだろう。

この日記では病状の記述はきわめて簡略である。ほとんどが大小二便の排泄に関する事項でしめられている。筆録者についてはその記載がないので判然としないうが、医家における病状経過の記録としてはなんとも

物足りない気がする。病状記録からみて法蘭院の病名を確定することはきわめて困難である。

『島田筑波集』（日本書誌学体系）の編者加藤定彦によれば、識語をかけた島田筑波は明治一八年（一八八五）に茨城県新治郡都和村に生まれ、本名は一郎である。筑波とは岡野知十について学んだ俳句の号である。青年期から文献考証や実地踏査の癖がこうじて、小田原書房を経営して学術出版を手がけるようになった。さらには月刊誌『今昔』を創刊してこの方面の発表誌としておおくの論文を掲載した。かたわら東京市職員や嘱託となつて、『東京市史稿』をはじめ『御府内備考』『本郷区史』などの膨大な基礎史料の編纂や校訂に従事している。昭和二六年（一九五一）九月一八日に六六歳で病歿した。

島田筑波は江戸学の第一人者である三田村鳶魚はじめ、森銑三、林若樹、三村竹清と面識があり、わが日本医史学会の会員でもあった。例会記録によると、昭和八年（一九三三）五月例会には「江戸時代の医家漫談」と題して、石坂宗哲の歿年齢が七二歳であること

を報告した。昭和一〇年（一九三五）一月例会では「中村中悰と其の一族」と題して、信濃国高遠藩の漢学者であり医師でもある中村中悰について報告した。このような世にかくれた医師を発掘して報告するという手法は森銑三などのもっとも得意とするところで、これを見ると島田筑波は森銑三などと同臭の江戸学研究者の有力な一員ということができよう。

島田筑波の識語をもつた古文書が、その手許からどのような経路によって山崎文庫に収蔵されるにいたったかについてはまったく不明である。